



Title	Revisiting Tagalog Null Arguments with Agreement: its Implications for Austronesian Syntax
Author(s)	大谷, 修樹
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105318
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (大 谷 修 樹)	
論文題名	Revisiting Tagalog Null Arguments with Agreement: its Implications for Austronesian Syntax (一致を伴うタガログ語の空項の再検討：オーストロネシア語族の統語論への示唆)
論文内容の要旨	
本研究は、主にフィリピンのマニラで使用されているタガログ語における空項の振る舞いを、統語的観点からどのように分析できるのかという点について考察したものである。主語や目的語のように述語を完成させるために必須となる要素を「項」と呼び、その項が何らかの理由で非顕在化したものを「空項」と呼ぶ。自然言語の中には空項を許す言語が存在することが知られており (Otani and Whiteman 1991; Oku 1998; Hoji 1998; Saito 2007; Takahashi 2008; Sakamoto 2017; Fujiwara 2022 など)、その代表例の一つとして日本語が挙げられる。例えば、「太郎は自分の車を洗ったが、二郎は_____洗わなかった。」のように、「洗う」という他動詞において目的語のみを空項にすることが可能であり、この空項は「二郎は自分(=二郎)の車を洗わなかった」という「緩やかな同一性解釈(sloppy reading)」を許す。このように、目的語といった「項」だけを省略する統語操作が「項省略」である。項省略の可否には言語間で差があることが指摘されており、Saito (2007) はその差を説明する有力な仮説として「反一致仮説」を提案した。この仮説によれば、述語と項の間に ϕ 素性の一致関係がある場合、その項は項省略できないとされる。これをジャワ語に拡張した Sato (2015) は、ϕ 素性の一致だけでなく態の一致も項省略を阻害し得ると主張した。これらの議論が正しければ、タガログ語に対して明確な理論的予測が立つ。タガログ語では述語と項の間に ϕ 素性の一致と態の一致の両方が観察されるため、反一致仮説に基づけばタガログ語では項省略は不可能であると予測される。しかし本研究では、この予測は当てはまらず、タガログ語では項省略が可能であることを示す。一見すると、タガログ語のデータは Saito (2007) や Sato (2015) に対する反例のように見える。しかし本研究は、それらのデータが実際には反例ではなく、むしろ反一致仮説を支持するものであることを示す。この主張が正しければ、タガログ語の統語構造に関して重要な示唆を与えるだけでなく、ジャワ語とタガログ語の間で項省略の可否に差が生じる理由についても説明を与えることが可能となる。 2章以降の本論文の構成は以下のとおりである。第2章では、先ほど述べた項省略と一致の関係に関する先行研究を概観する。Saito (2007) により提案された反一致仮説がジャワ語においても成立するのかどうかを検証したのが、Sato (2015) である。彼は、ジャワ語には顕在的な ϕ 素性の一致は見られないが、主語と動詞の間に態の一致が見られることを観察した。反一致仮説の下では、ジャワ語では ϕ 素性の一致が見られないため、主語と目的語の双方が項省略を許すことを予測する。しかし、Sato (2015) によれば、目的語の省略は許される一方で、主語の省略は許されない。Sato (2015) は、この非対称性を説明するために、阻害要因となるのは ϕ 素性の一致だけでなく、態の一致もまた項省略を阻止し得ると主張した。この議論は、本論文で扱う中心的な問題の一つにつながる。すなわち、態の一致と ϕ 素性の一致の双方を示すタガログ語にも同様の制約が当てはまるのか、という点である。 第3章では、タガログ語における空項の派生を検討する。タガログ語は顕在的な態の一致と ϕ 素性の一致を示すにもかかわらず、空項は緩やかな同一性解釈を許す。この経験的事実は、一見すると、Saito (2007) が提案し Sato (2015) が発展させた反一致仮説に対する反例となる。Richards (2003) や Sabbagh (2005) のような先行研究では、これらの空項を動詞残留型動詞句削除として分析する。このアプローチが正しいのであれば、反一致制約が項省略に対してのみ適用され、動詞残留型動詞句削除には適用されないため、制約違反を回避でき、タガログ語の空項がなぜ緩やかな同一性解釈を許すのかという問いに説明を与えることができる。しかし本論文は、タガログ語の空項は動詞残留型動詞句削除ではなく、項省略として分析するのが最も適切であると主張する。タガログ語で項省略が可能になる核心的な要因は、接語の存在である。タガログ語の接語が「ボディガード」として機能し、その接語は、それと関連する項が態の素性や ϕ 素性との一致関係に入ることを防ぐ役割を果たすと提案する。Yamada and Miyamoto (2017)、Bošković (2018)、Erlewine and Levin (2021) の提案に基づき、本研究では、タガログ語の接語の代名詞は省略対象	

となる項と結合し、その項に代わって一致に入ると主張する。その結果、接語の補語位置にある項は、態の素性や ϕ 素性との一致関係に入っていないため、反一致制約に違反することなく省略されることが可能になる。この分析は、反一致仮説の中心的洞察を保持しつつ、空項が緩やかな同一性解釈や量化解釈を許すという経験的事実を説明する。

第4章では、タガログ語における述語と一致関係を結ぶ項の統語的位置と、その項に付与される格形態に焦点を当てる。タガログ語では、述語と態の一致関係にある項には「ang」という標識が付与され、他の項と形態的に区別されることが知られている。先行研究に従い、本研究ではこの ang 標識をもつ項をピボット (pivot) と呼ぶ。本章では、ピボットの統語的性質をめぐる二つの主要なアプローチを紹介する。一つは、ピボット標識を主題標識とみなすもので (以下、A' 性質アプローチ)、もう一つは、ピボットが A 移動によって最上位の統語位置で主格 (nominative Case) を受けるとするものである (以下、A位置アプローチ)。両アプローチは多くのデータを説明する一方で、それぞれ深刻な経験的問題を抱える。A' 性質アプローチは、ピボットが本質的に主題解釈を受けると仮定し、主題性は不定名詞句や wh 句とは基本的に両立しないと予測する。しかし実際には、不定名詞や wh 句がピボット標識と共に共起可能であり、この予測は誤りである。一方、A位置アプローチは、A' 性質アプローチが直面する問題を回避できるものの、このアプローチでは、ピボットは常に他の統語要素よりも高い位置へ A 移動するという誤った予測を導く。この予測は、再帰代名詞、相互代名詞、そして (弱・強) 交差効果に関するデータによって反証される。これらの問題に対処するために、本論文は、タガログ語が AV と非AV 節の構造的対立を特徴とする分裂能格性を示すと提案する。非AV 節では、ピボットは Spec, AgrP に A 移動し、そこで絶対格を受ける。重要なのは、AgrP が動作主を導入する VoiceP よりも構造的に低い位置にあるため、ピボットが絶対格を得るために A 移動を行ったとしても、その最終位置は動作主より低くなる点である。この構造により、両者の間に貫した c-統御の非対称性が生じ、ピボットが動作主を束縛できない理由を説明することができる。さらに本章では、場所語ボイス (LV) および状況語ボイス (CV) 構文におけるピボットが付加詞ではなく統語的な項であることを示す新たな証拠を提示する。これらのピボットに項省略が適用可能であるという事実がこの主張を支持し、これらの構文がタガログ語においてアプリカティブ構文を含むという見解を強化する。

第5章では、タガログ語のピボットに対するラベリング理論に基づく分析を展開する。本章の動機は、類型論的観察に由来する。ラベリング理論は、形態格または ϕ 素性の一致のいずれかを示す言語に対して適用されてきたが、両方の性質を併せ持つ言語には体系的に適用されてこなかった。そのため、タガログ語を調査することで、重要な経験的ギャップを埋めることが可能となる。Saito (2016, 2018) は日本語のデータを基に、格標識が一致によってその格の値が与えられない場合、その格標識は反ラベリング装置として機能すると提案している。本論文では、この考えをタガログ語に拡張し、タガログ語の絶対格標識 ang もまた、格の値が ϕ 素性の一致または態の一致によって決定されない場合に限って反ラベリング装置として振る舞うと論じる。この体系では、Agr は英語の T と同様に弱素性をもつ要素とみなされ、単独ではラベルを投射できない。Agr のラベリングを成立させるには、その指定部にあるピボットとの素性共有が必要となる。この仕組みにより、一つの節で複数のピボットが許されない理由が説明される。さらに本章では、英語では空項が許されないにもかかわらず、タガログ語で空項が文法的となる理由も、ラベリングに基づいて説明し得ることを示す。もしタガログ語の項省略が接語を伴うものであるならば、接語がラベル付与に貢献し結果的に {DP-Agr} のラベルを決定することができるからである。接語は ϕ 素性をもつため Agr と一致関係に入り、その補部にある項が項省略によって非顕在化していたとしても、ラベリングに必要な素性共有が可能となる。その結果、 ϕ 一致を示す言語であるタガログ語においても空項が許容される。これは、Tが弱素性であるが、接語を欠く英語とは対照的である。

第6章では、本論文の成果をまとめ、今後の研究の方向性を示す。空項がどのように派生するのかという問題は、これまで多く議論されてきたが、大きく二つのアプローチが提案されている。すなわち、PF 省略分析 (Ross 1969, Sag 1976, Johnson 2001, Merchant 2001, Goldberg 2005, Aelbrecht 2010, Takahashi 2013, Fujiwara 2022) と LF コピー分析 (Williams 1977; Fiengo and May 1994; Oku 1998; Saito 2007; Sakamoto 2017) である。Sakamoto (2019) によれば、これら二つのアプローチを区別する一つの方法は、空項からの顕在的な抜き出しが可能かどうかを調べることである。この考えに基づき、本論文では、タガログ語において空項からの顕在的な抜き出しが可能かどうかを検証し、第6章で提示したデータの分析へ向けた方向性を示した。第二に、分析をオーストロネシア語以外の言語へ拡張する可能性についても検討した。一般に緩やかな同一性解釈を許さないとされる言語であっても、特定の状況下では空項が緩やかな同一性解釈を許すことが報告されている。これらの言語では、接語の存在が空項に緩やかな同一性解釈をもたらす要因となっているようである。この議論は、空項がどのような条件のもとで緩やかな同一性解釈を許すのかという問題をより深く理解するうえで、重要な示唆を与えることが期待される。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (大 谷 修 樹)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	宮本 陽一
	副 査	教授	越智 正男
	副 査	講師	杉本 侑嗣

論文審査の結果の要旨

本論文は、主にフィリピンのマニラで使用されているタガログ語における空項の統語的な振る舞いを考察したものである。主語や目的語のように文の構成上必須の要素は「項」と呼ばれ、その項のみを省略する統語操作は「項省略」と呼ばれる。この項省略という操作は、すべての言語で許されるわけではないことが先行研究によってすでに示されており、項省略に関する代表的研究である Saito (2007) は、その可否に関する言語間差異を説明するために「反一致仮説」を提案した。この仮説によれば、述語と項の間に ϕ 素性の一致関係がある場合、その項は項省略できないとされる。これをジャワ語に拡張した Sato (2015) は、 ϕ 素性の一致だけでなく態の一致も項省略を阻害し得ると主張した。これらの議論が正しければ、タガログ語に対して明確な理論的予測が立つ。タガログ語では述語と項の間に ϕ 素性の一致と態の一致がともに観察されるため、反一致仮説に基づけば、タガログ語では項省略は不可能であると予測される。しかし、本論文では、この予測に反して、タガログ語では項省略が可能であるというデータを提示している。タガログ語のデータを説明するために、Yamada and Miyamoto (2017)、Bošković (2018)、Erlewine and Levin (2021) の提案に基づき、タガログ語の接語が省略対象となる項と結合し、その項に代わって一致に入るという分析を提案している。その結果、接語の補語位置にある項は、態の素性や ϕ 素性との一致を起こしておらず、その項を省略しても反一致制約に違反しないため、タガログ語では項省略が認可されると主張している。

また本論文は、タガログ語における述語と一致関係を結ぶ項の統語的位置と、その項に付与される格形態にも焦点を当てている。*ang* 標識を伴う項（ピボット）の統語的性質をめぐる二つの主要なアプローチの経験的問題点を指摘した上で、タガログ語が Actor Voice (AV) 構文と非 AV 構文とで異なる構造をとるという分裂能格性を示すことを提案している。非 AV 構文では、ピボットは Spec, AgrP に A 移動し、そこで絶対格を受ける。この際、動作主を導入する VoiceP よりも AgrP が構造的に低い位置にあるため、ピボットが絶対格を得るために A 移動を行ったとしても、その最終位置は動作主より低くなる。この構造が正しければ、先行研究の経験的問題点を解決するだけでなく、先行研究で見落とされていた、ピボットが動作主を束縛できないという事実についても説明を与えることができると論じている。

さらに本論文は、タガログ語のピボットに対するラベリング理論に基づく分析を提案する。Saito (2016, 2018) は日本語のデータに基づき、格標識が一致によって格の値を与えられない場合、それが反ラベリング装置として機能すると主張している。本論文ではこの仮説をタガログ語に拡張し、格標識 *ang* も、 ϕ 素性の一致によって格の値が決定されない場合に限って反ラベリング装置として振る舞うと提案している。この体系では、Agr は英語の T と同様に弱主要部であるため、単独ではラベル付与ができず、指定部にあるピボットとの素性共有が必要である。この分析が正しければ、*ang* を伴った句が節内に一つしか出現しない理由について説明を与えることができる。本論文では、素性共有は一対一で行われるという先行研究の主張に基づき (Chomsky 2008, Saito 2024)、格標識を与えることができる Agr が節内に一つしか現れないため、一つの節で複数の *ang* 句が許されないと論じている。さらに、英語と同様に弱主要部を持つタガログ語で空項が容認される理由についても、ラベル付与の観点から説明できると主張している。項省略の対象である項が接語を伴うという本論文の分析に従い、 ϕ 素性をもつ接語が Agr と一致することで、項が非顕在化していても素性共有が可能となり、{DP AgrP} のラベルが決定される。その結果、接語を持たない英語とは異なり、タガログ語では空項が認可されると結論づけている。

本論文は、生成文法における最新の枠組みである極小主義の枠組みにおいて、理論の発展を牽引してきた「削除現象」、特に言語間差異が見られる項削除の現象に焦点を当て、これまで検討が十分になされてこなかったタガログ語を理論的な予測を明確にした上で詳細にわたり検討している。理論的な側面のみならず経験的な側面にも十分に配慮したバランスの良い論文であると判断した。特に理論的には一見反例に思えるデータから先行研究の分析を安易に棄却するのではなく、当該言語の接語の存在に着目し、先行研究の分析を支持するのがタガログ語であると結論付けた点は高く評価できる。項削除の可否に関する言語間差異については、その要因を本論文が検討しているφ素性の有無に求める仮説に加えて、スクランプリング操作の可否に求める仮説（Oku 1988）がある。この2つの仮説は全く異なるように見えるが、ラベリング理論に基づく分析からこの2つの仮説の共通点が見いだせる可能性があり、当該理論のもと更なる検討を重ねることによって、新たな理論の展開が期待できるが、現時点では課題として残されている。また、接語が項として振舞うことに加えて、顕在的なDPも項の性質を示す理由については必ずしも説明しきれていない点、ロマンス諸言語の接語とタガログ語の接語の比較検討がなされていない点等も課題として残されている。しかしながら、こうした点は本論文の価値を減じるものではなく、全体として将来性ならびに発展性が強く認められる意欲的な研究である。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。